

サクラの外來害虫 “クビアカツヤカミキリ” 被害防止の手引



埼玉県環境科学国際センター

目次

1. クビアカツヤカミキリについて 1
2. 国内および県内への侵入状況 2
3. 被害実態 4
4. 被害確認の方法 7
5. 防除の方法 7
6. 成虫拡散防止ネット装着法の検討事例10
7. サクラ以外の樹種の被害事例11
8. クビアカツヤカミキリと間違えやすい昆虫12
9. お願いとお問い合わせ13
10. 情報発信13

1. クビアカツヤカミキリについて

1) 属性

- * カミキリムシ科ジャコウカミキリ属に属する。
- * 学名は、*Aromia bungii* (アロミア・ブンギ)。
- * 特定外来生物に指定され(平成30(2018)年1月)、飼育や運搬などは原則禁止。

2) 形態

- * 成虫の体長は25-40mm程度。
- * 成虫の前胸背板は明赤色で、他は光沢のある黒色。前胸背板の側面に頑丈なとげ状の瘤(こぶ)を一对持つ(図1と図2の青矢印の部分)。
- * 触角は黒色で、オス(図1)の触角は体長より長く、メス(図2)の触角は体長よりも短い。

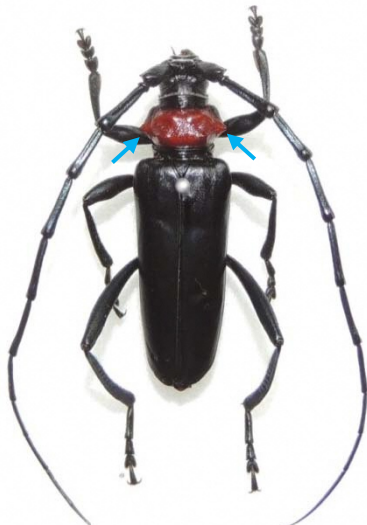


図1 オス成虫



図2 メス成虫

3) 生態

- * 自然分布は、中国、モンゴル、朝鮮半島、ベトナムなど。
- * サクラ、ウメ、モモ、スモモなどの主にバラ科の樹木を加害する。
- * 幼虫(図3)は、樹木の生木(辺材や心材)を摂食し、フラス(フンと木屑が混ざったもの)(図4)を排出しながら、樹体内で2~3年かけて成長し、蛹(さなぎ)となる。
- * 幼虫の活動期は春から秋にかけてであり、この間にフラスが排出される。
- * 蛹は6月中旬から8月上旬に成虫となり、樹体外に脱出する。
- * メスの成虫は交尾後、幹や枝の樹皮の割れ目などに産卵する(図5)。卵は8~9日後に孵化する。メス1頭あたり1000個近くの卵を産むこともある。
- * 成虫の寿命は、野外では1ヶ月程度。成虫で越冬はしない。



図3 幼虫



図4 フラス(褐色のカリントウ状で比較的硬い)



図5 サクラの樹皮の割れ目に産み付けられたクビアカツヤカミキリの卵(長径1~1.5mm程度)
赤丸で囲まれた部分に卵がある。この写真は、埼玉県農業技術研究センター内の実験室で撮影した。

2. 国内および県内への侵入状況

1) 侵入経路

* 輸入木材や梱包用木材、輸送用パレットなどに幼虫が潜んだまま運ばれてきて、国内で成虫に羽化し、繁殖したものと考えられている。

2) 国内への侵入状況

* 平成24(2012)年に愛知県、平成25(2013)年に埼玉県、平成27(2015)年に群馬県、東京都、大阪府、徳島県、平成28(2016)年に栃木県で、それぞれ初めて被害が確認された(表1)。ただし、埼玉県では、平成23(2011)年に、深谷市でオスの成虫(1頭)が採集されたが、このとき、当地では、被害は確認されなかった。

* 被害が確認された都府県での被害樹種は、サクラ、モモ、スモモ、ウメといったバラ科の樹種である。

表1 国内でのクビアカツヤカミキリによる被害確認の状況と被害樹種

都府県	被害初回確認年	被害樹種
愛知県	2012年	サクラ、ウメ
埼玉県	2013年	サクラ、スモモ、ウメ、モモ
群馬県	2015年	サクラ、モモ、スモモ、ウメ
東京都	2015年	サクラ、ウメ
大阪府	2015年	サクラ、ウメ、モモ、スモモ
徳島県	2015年	サクラ、モモ、スモモ、ウメ
栃木県	2016年	モモ、スモモ、サクラ、ウメ

(環境科学国際センター調べ)

3) 県内への侵入状況

* 県内では、平成25(2013)年に、県南東部の草加市と八潮市で、クビアカツヤカミキリによるサクラの被害が初めて確認された。翌年の平成26(2014)年には、八潮市で被害が確認されたが、その後県への被害報告はなく、平成29(2017)年になって、県南東部の越谷市、県北部の羽生市、行田市、熊谷市、深谷市および加須市で、同種の侵入・被害が新たに確認された。

* 平成30(2018)年に、環境科学国際センターは、県民参加による「クビアカツヤカミキリ発見大調査」を実施し、県内における被害状況を調べた。その結果、平成31(2019)年3月末現在、県南東部の草加市、八潮市および越谷市、県北部の羽生市、行田市、熊谷市、深谷市および加須市で、樹木被害や成虫の生息が確認され(図6)、被害は拡大傾向にあることが分かった。なお、図6は、被害確認地点などを含む調査地点マップであるが、このマップに関する詳細は、当センターホームページ上の「クビアカツヤカミキリ情報」(以下のURL)を参照されたい。

<http://www.pref.saitama.lg.jp/cess/center/kubiaka.html>

* 県内での被害は、これまで、ほとんどがサクラでの報告だったが、県北部を中心に、モモ、スモモおよびウメの被害も報告されている。

⇒ **更なる被害の拡大が懸念される!**

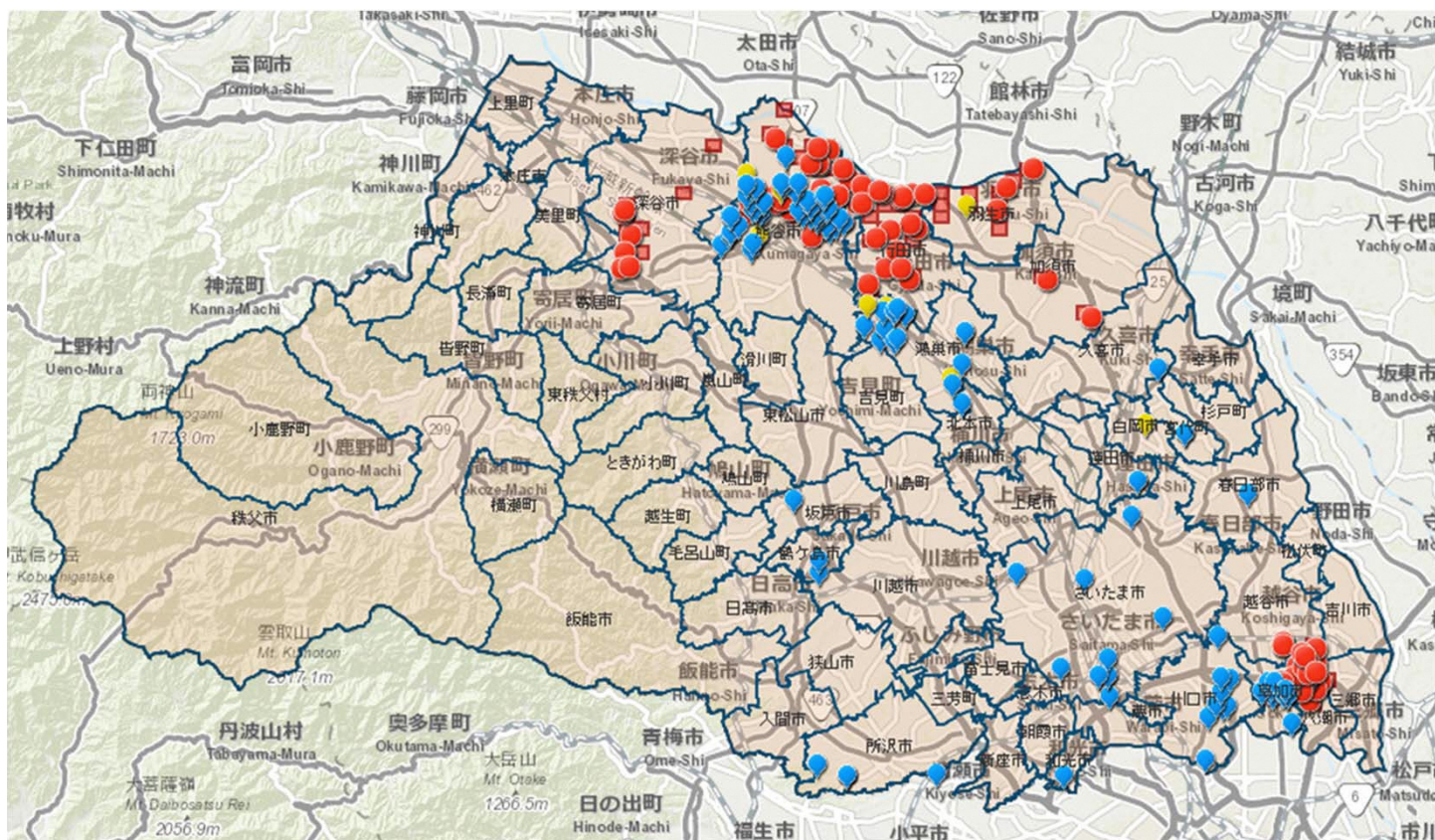


図6 クビアカツヤカミキリ調査地点マップ(2019年3月末現在)

- :被害報告地点(成虫のみの確認を含む)
- :被害報告三次メッシュ(成虫のみの確認を含む)
- :経過観察地点(フラスの形状が不鮮明などの理由で、被害か否か正確に判断できていない地点)
- :被害未発生報告地点

3. 被害実態

1) 樹体に幼虫が侵入すると、根元に大量のフラスがばらまかれて溜まる場合が多い(図7)。また、フラスは、木の葉に絡みついている場合(図8)や、幹が二つに分かれる股の部分に溜まっている場合(図9)などもある。これらのことから、フラスは、排出されたものが上から落ちてきて溜まる場合が多いと考えられる。



図7 サクラの根元に散乱したフラス



図8 木の葉に絡みついたフラス



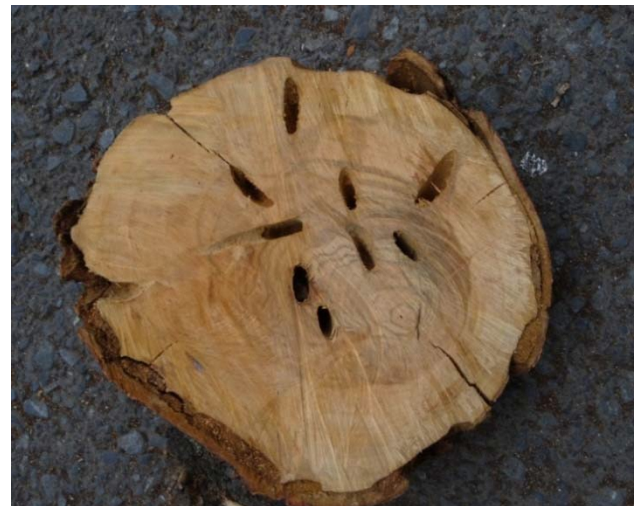
図9 幹が二つに分かれる股の部分に溜っているフラス

2) フラスが溜まっている場所の上方の幹や枝には、フラス排出孔(図10の黄色矢印)が認められ、そこから挽き肉のようにフラスが排出される。



図10 フラス排出孔(黄色矢印)の確認事例

3) 1頭の幼虫による樹体の摂食範囲はかなり広く(図11)、被害は心材にまで至る(図12)。



↑ 図12 幼虫に心材まで摂食されたサクラの樹体断片

← 図11 サクラの樹体に侵入した1頭の幼虫による摂食範囲
(樹皮を剥いて内部を露出させると、幅約40cmにわたり樹体の表層が摂食されていた。幼虫は4cm程度まで成長しており、心材にまで侵入していたところを捕殺された。)

4) 幼虫は樹体を摂食しながらその内部で2～3年を過ごし、蛹になった後、樹体表面に開けられた成虫脱出孔(楕円形で、長径が2～3cm程度)(図13)から成虫となって樹体外に脱出する。1本の樹体に複数個体の幼虫が侵入・羽化すると、その内部は激しく被害を受け、地上部への水揚げなどが悪くなることから、樹体が枯死することもある(図14)。

⇒ 早期発見、早期防除が必要！！



図13 サクラの樹体に生じた成虫脱出孔(黄色矢印)の確認事例



図14 サクラの樹体に生じた成虫脱出孔(黄色矢印)と枯死

4. 被害確認の方法

1) フラスの確認

- * 根元などに大量に散乱・堆積するフラス(図7、図8、図9)があるか否かを確認する。
フラスは、通常、褐色のカリントウ状で比較的硬いのが特徴。
→ フラスがあれば、樹体内に幼虫が生存していることを示す。

2) フラス排出孔の確認

- * フラスが樹体のどこから排出されているのかを確認する。
樹体からフラスが挽き肉状にとび出している場所がフラス排出孔(図10)。
ただし、フラス排出孔が小さく、見つけにくいことがある。
→ フラス排出孔は、農薬を注入するときの注入口となる。

3) 成虫脱出孔の確認

- * 樹体に成虫脱出孔(図13、図14)があるか否かを確認する。
成虫脱出孔は、楕円形で、長径が2~3cm程度。
→ 成虫脱出孔があれば、過去にその樹体から成虫が羽化したことを示す。

4) 樹体枯死の確認

- * 樹体に枯死した箇所(図14)があるか否かを確認する。

⇒ 上記の4項目について確認し、被害の程度を把握した上で防除の方法を検討する。

5. 防除の方法

1) 野外で成虫を見つけたらすぐに捕殺する。

- ### 2) 春から秋にかけて、樹木の根元などにフラスが確認された場合、フラス排出孔を見つけ、針金や千枚通しなどでフラスを取り除くとともに、そこから針金を挿入して幼虫を刺殺するか、登録農薬(薬剤名:ロビンフト、アクセルフロアブル、園芸用キンチョールE、マツグリーン液剤2またはバイオセーフ)を注入して駆除する(図15)。なお、農薬を使用する場合は、取り扱い上の注意に従うこと(表2)。処理後には見回りを実施し、フラスの排出がないことを確認する。フラスの排出が確認された場合は、再度、農薬を注入する。



図15 農薬処理の事例

表2 サクラに関するクビアカツヤカミキリの防除農薬と農薬登録上の規定

<フラス排出孔に注入する農薬>

農薬名 (成分名)	希釈倍率	使用時期	使用回数	使用方法	対象	同一成分を含む農薬の 総使用回数
ロビンフッド (フェンプロパトリン)	—	—	6回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	幼虫	6回以内
アクセルフロアブル (メタフルミゾン)	100倍	—	6回以内	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで樹幹注入 ^{注1)}	幼虫	6回以内
園芸用キンチョールE (ペルメトリン)	—	—	—	食入部にノズルを差し込み、薬剤が食入部から流出するまで噴射	幼虫	—
マツグリーン液剤2 (アセタミプリド)	50倍	発生初期	5回以内	食入孔に注入	幼虫	5回以内
バイオセーフ (スタイナーネマカーポカプサエ)	2500万頭 (約10g)	幼虫発生期	—	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで樹幹注入 ^{注1)}	幼虫	—

<樹体に穴を開けて注入する農薬>

農薬名 (成分名)	希釈倍率	使用時期	使用回数	使用方法	対象	同一成分を含む農薬の 総使用回数
アトラック液剤 (チアメトキサム)	—	幼虫発生前～ 幼虫発生期	3回以内	樹幹注入 ^{注2)}	幼虫	3回以内
ウッドスター (ジノテフラン)	—	新葉展開後～ 落葉前まで	3回以内	樹幹注入 ^{注2)}	幼虫	5回以内

<幹やその分枝に巻き付ける農薬>

農薬名 (成分名)	希釈倍率	使用時期	使用回数	使用方法	対象	同一成分を含む農薬の 総使用回数
バイオリサ<カミキリ>スリム (ポーベリアブロンニアティ)	—	成虫発生初期	—	主幹又は主幹の分枝部分に巻き付ける	成虫	—

<樹体に散布する農薬>

農薬名 (成分名)	希釈倍率	使用時期	使用回数	使用方法	対象	同一成分を含む農薬の 総使用回数
アクセルフロアブル (メタフルミゾン)	1000倍	成虫発生直前～ 成虫発生期	6回以内	散布	成虫	6回以内
マツグリーン液剤2 (アセタミプリド)	200倍	発生初期	5回以内	散布	成虫	5回以内
モスピラン顆粒水溶剤 (アセタミプリド)	2000倍	発生初期	5回以内	散布	成虫	5回以内
日農モスピラン顆粒水溶剤 (アセタミプリド)	2000倍	発生初期	5回以内	散布	成虫	5回以内

注1) フラス排出孔に農薬を注入することを示す。

注2) 樹体に穴を開けて農薬を注入することを示す。注入量と注入方法は、各農薬指定の使用方法に従うこと。

- 3) フラス排出孔から大量で大型のフラスが確認された場合、羽化時期が近づいていると考えられるため、2)と同様に、フラス排出孔から農薬注入などを実施するとともに、成虫の拡散防止のため、羽化期(6月から8月)前に、樹木の幹にネット(目合4mm以下の防鳥ネットなど)を、1周から1周半程度巻き付ける(図16)。なお、ネットを巻き付ける前に、樹体の幹または幹の分枝部分に、登録農薬のバイオリサ<カミキリ>スリム(昆虫寄生性糸状菌製剤)を巻き付けておくと効果的である(図17)。成虫が、同製剤に触れて糸状菌に感染すると、カビが生えて死に至る。なお、農薬を使用する場合は、取り扱い上の注意に従うこと(表2)。ネットを巻き付けた後は、定期的に見回り、羽化した成虫がネット内にいれば捕殺する。



図16 農薬処理とネットの巻き付けを併用した事例



図17 バイオリサ<カミキリ>スリムを巻き付けたサクラ(この上にネットを巻き付ける)

4) 樹体からフラスが排出され、樹体内に幼虫の生存が認められた場合、ドリルで樹体に穴を開け(図18)、そこから登録農薬(薬剤名:アトラック液剤またはウッドスター)を適量注入することにより(図19)、幼虫を駆除することができる。この方法では、樹体に注入された農薬成分が蒸散流に乗り、樹体全体に拡散・浸透する仕組みになっている。幼虫は農薬成分が浸透した樹体の一部を摂食することにより駆除される。しかし、幼虫による被害が大きく、すでに樹体の一部に枯死の兆候が現れているような場合は、農薬の拡散・浸透が進まず、効果が低い可能性がある。また、蛹化した個体や成虫には効果が現れないと考えられる。したがって、樹体内からの羽化・脱出時期が近づいていることが予想される被害木の場合は、ネットの巻き付けとの併用を推奨する。なお、農薬を使用する場合は、取り扱い上の注意に従うこと(表2)。



図18 樹幹にドリルで穴を開ける様子



図19 穴に農薬(ウッドスター)を注入する様子

5) 樹体に複数のフラス排出孔や成虫脱出孔が確認され、特に枝などに枯死が確認された場合は、伐倒処理することが望ましい。伐採した材は、幼虫が潜んでいる可能性があるため、必ずチップ化または焼却処分する。また、残った切り株に穴が開いている場合は、成虫が脱出しないように、ネットを被せておくなどの処理(図20、図21)が必要である。



図20 ネットを被せた切り株



図21 樹脂で表面を固め一部を覆土した切り株

6. 成虫拡散防止ネット装着法の検討事例

成虫拡散防止ネットの装着法については、現場にある樹木の樹形によって様々であるが、当センターでは、成虫を拡散させないという観点からその方法を検討したので、参考までに、一例を図22に示す。この方法では、既製の防鳥ネット(縦3m×横4mで目合4mm)を用いた。ネットの一端を数回折り返し、ジャバラを作りながら針金で串刺しにする。これを10cm幅のスポンジ(厚さ5mm)を巻き付けた幹に取り付けた。ネットの另一端は、スカート状に下方に垂らし、地面から飛び出した根をできる限り覆うように広げた。ネットの端は内側に数回折り返し、U字杭を地面に打ち込んで留めた。

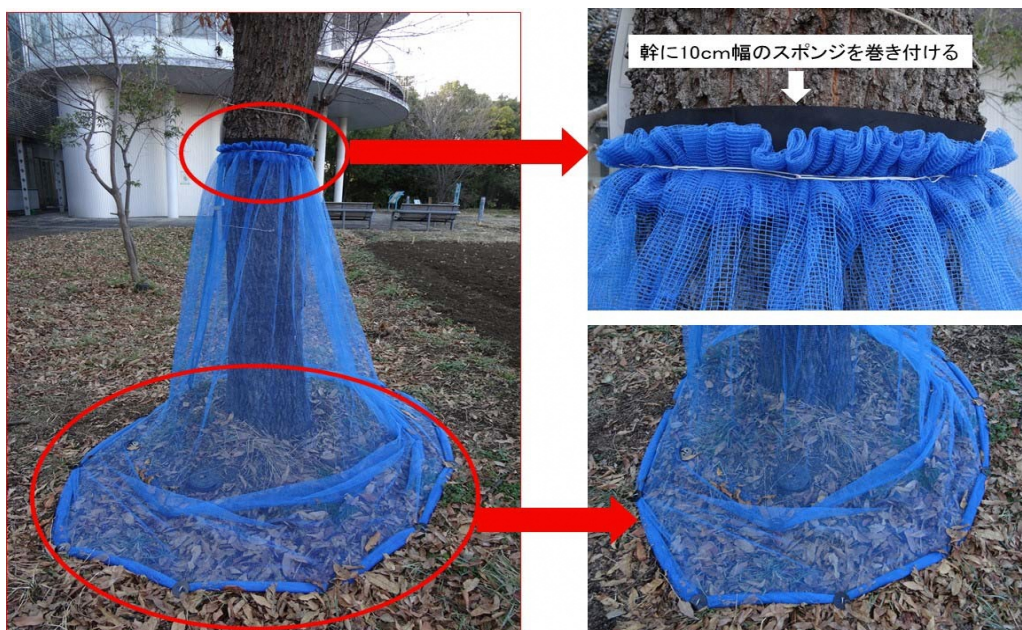


図22 成虫拡散防止ネットの装着事例

7. サクラ以外の樹種の被害事例

埼玉県内では、サクラ以外にも、これまでに、スモモ(図23、図25)、モモ、およびウメ(図24)で被害が確認されている。



図23 スモモの幹から排出されたフラス



図24 ウメの幹から排出されたフラス



図25 スモモの樹体に生じた成虫脱出孔(黄色矢印)と枯死
(1本の樹体に複数個体の幼虫が侵入・羽化したため、
樹体の一部が枯死したものと考えられる。)

8. クビアカツヤカミキリと間違えやすい昆虫

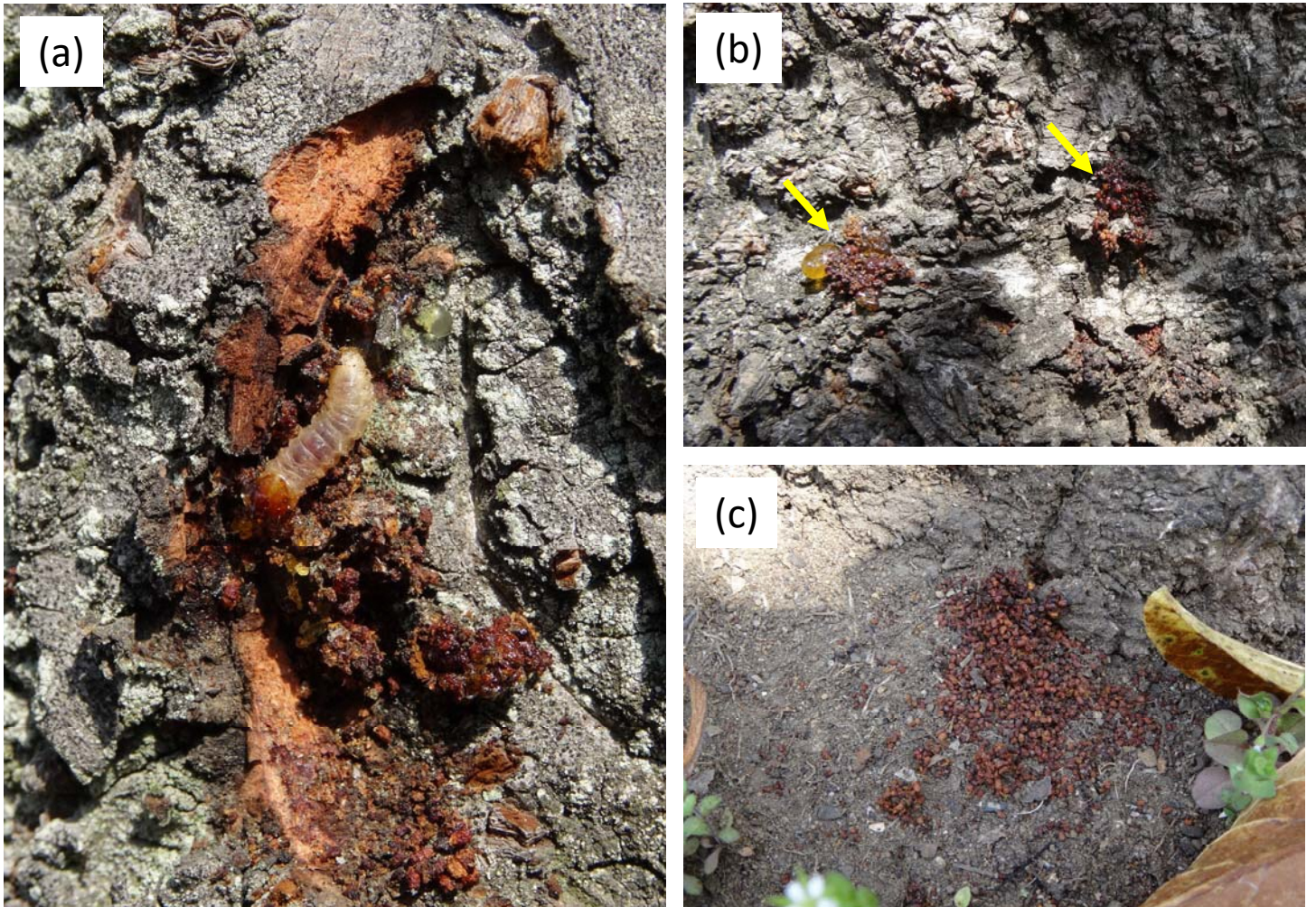


図26 コスカシバの幼虫(a)、フラス排出孔(b、黄色矢印)および地面に散乱したフラス(c)
コスカシバはガの仲間で、サクラの他、ウメ、モモ、スモモなどの穿孔(せんこう)性害虫として知られる。
幼虫により樹体からフラスが排出されるため、クビアカツヤカミキリ幼虫による被害と間違えやすい。



図27 ヨコヅナサシガメ
ヨコヅナサシガメはカメムシの仲間で、サクラなどの樹木の幹周辺に生息している。昆虫に口吻を刺して体液を吸収する。虫体に赤色の部分があるため、クビアカツヤカミキリ成虫と間違えやすい。



図28 クビアカトラカミキリ
クビアカトラカミキリは、クビアカツヤカミキリと同じカミキリムシの仲間で、前胸が赤いため、クビアカツヤカミキリ成虫と間違えやすい。



図29 蟻道(ぎどう、黄色矢印)

蟻道は、その字のとおり、「アリの道」のことで、アリが土や排泄物・餌の食べかすで作ったトンネルのことをいう。アリはこの中を通して移動する。蟻道は樹体上に作られるため、クビアカツヤカミキリ幼虫によるフラスが樹体から排出されている状況と間違えやすい。

9. お願いとお問い合わせ

クビアカツヤカミキリの成虫や樹体から排出されたフラスを発見した場合は、それらの写真を撮って、市町村の環境関連部局または環境科学国際センター(下記の連絡先)までお知らせください。

また、この手引とクビアカツヤカミキリに関するお問い合わせは、環境科学国際センターまでお願いします。

<連絡先> 埼玉県環境科学国際センター 自然環境担当
〒347-0115 埼玉県加須市上種足914
TEL: 0480-73-8331(代表) FAX: 0480-70-2031
E-mail: g738331@pref.saitama.lg.jp

10. 情報発信

1)クビアカツヤカミキリに関する情報を、以下のURLから発信します。

<http://www.pref.saitama.lg.jp/cess/center/kubiaka.html>

2)クビアカツヤカミキリの生態と防除について、出前講座を行います。詳しくは、以下のURLから、「出前講座」のタグを選択し、出前講座テーマ一覧から「自然環境」分野のテーマをご覧ください。

<https://www.pref.saitama.lg.jp/cess/shiryo/index.html>

“サクラ被害防止プロジェクト”

Stop

クビアカ

みんなでサクラをクビアカツヤカミキリから守りましょう！



埼玉県マスコット
「コバトン」と「さいたまっち」

サクラの外来害虫“クビアカツヤカミキリ”
被害防止の手引

発行者：埼玉県環境科学国際センター
〒347-0115 埼玉県加須市上種足914
TEL：0480-73-8331(代表)
FAX：0480-70-2031
E-mail： g738331@pref.saitama.lg.jp

発行年月：平成30(2018)年1月 第1版
平成30(2018)年2月 第2版
平成30(2018)年8月 第3版
令和元(2019)年8月 第4版